

平成24年度

福岡県国公立幼稚園教育研究大会

福岡地区公立幼稚園教育研究大会

研究紀要

研究主題

人とかかわる力を育てるための保育の在り方

—友達とのかかわりを広げる環境構成の工夫を通して—



平成24年10月19日（金曜日）

福岡市立雁の巣幼稚園

研究主題

人とかかわる力を育てるための保育の在り方 ～ 友達とのかかわりを広げる環境構成の工夫を通して ～



I 研究の概要

1 研究主題について

(1) 主題設定の理由

【 新しいふくおかの教育計画から 】

- ・ 心豊かにたくましく生きる子どもの育成
- ・ 子どもの力を引き出し発揮させる教育の推進

【 幼稚園教育要領から 】

- ・ 幼児期にふさわしい生活
- ・ 遊びを通しての総合的な指導
- ・ 一人一人の特性に応じた指導

【 幼児の実態から 】

- ・ 何にでも興味を示しかかわろうとする。
- ・ いろいろな遊びに関心をもつが長続きしない。
- ・ 異年齢で遊ぶ場が少ない。
- ・ 協同して遊ぶ経験が少ない。

(2) 主題および副主題について

【 人とかかわる力を育てるとは 】

- ・ 友達と遊ぶことを楽しいと感じる心情を育てること
- ・ 友達と一緒に遊ぼうとする意欲を育てること
様々なことに興味をもち、主体的に行動しようとする態度を育てること

【 友達とのかかわりを広げるとは 】

- ・ 安心感をもってやりたいことに取り組むこと
- ・ 自分なりに考え、自分の力でやってみようとする
こと
- ・ 友達と協力して、充実感を得ること

2 研究の目的

友達とのかかわりに視点をあて、幼児が主体的に遊びにかかわり友達と一緒に遊びを楽しめるような環境構成の工夫を通して、人とかかわる力を育てる。

3 研究の仮説

友達とのかかわりを広げることができるような遊びの環境構成を工夫すれば、幼児の人とかかわる力は育っていくであろう。

4 研究の内容

- 幼児が繰り返し遊びを楽しむための遊具・用具・素材の工夫
- 幼児同士の交流が生まれる遊びの空間・時間の工夫
- 遊びの年間計画表の活用や教師の援助のタイミングの工夫



新しいふくおかの教育計画

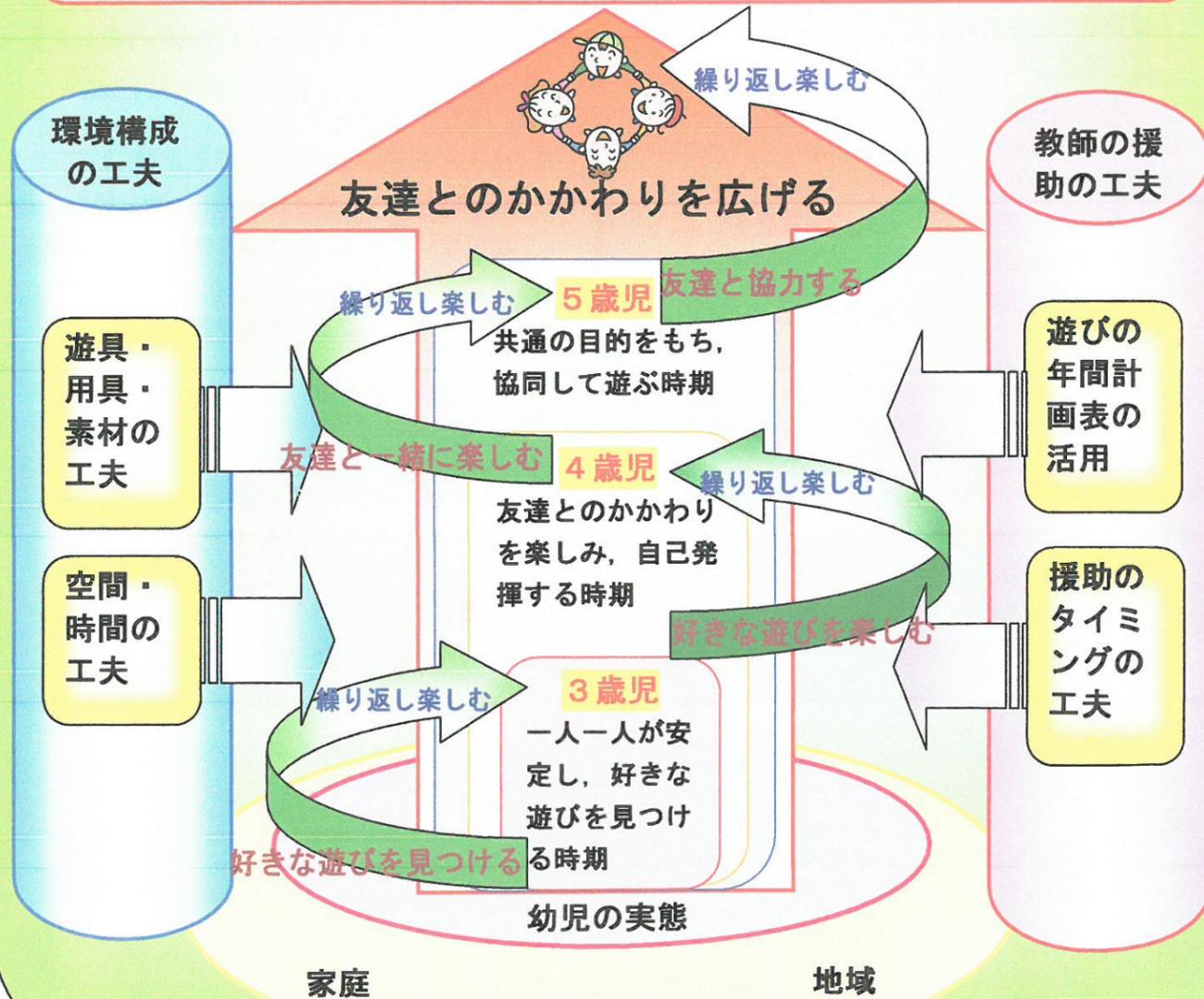


基本的生活習慣を身につけ、自ら学ぶ意欲と志を持ち、心豊かにたくましく生きる子どもをはぐくむ

めざす子どもの姿

人とかかわる力を身につけた心豊かな子ども

- 明るく元気で
たくましい子ども
- 思いやりのある
やさしい子ども
- 自然を愛し感性
豊かな子ども
- よく考え言葉で
伝え合う子ども
- 思いを豊かに表
現する子ども



II 研究の実際

友達とのかかわりを広げる

幼児の姿

環境構成の工夫

幼児の変容

5歳児

- ◇ いろいろな素材や用具の特徴に気付き、特徴を生かして積極的に使おうとする。
- ◇ 同じ目的をもって友達と共に協同的な遊びを楽しむ。
- ◇ 友達と考えを出し合ったり、工夫したりすることを楽しむ時期。

◎ポイント

- ・ 様々な遊具・用具・素材を自由に使えるようにする。
- ・ 試行錯誤しながら仲間意識を強め、見通しをもって遊びの場をつくる。
- ・ 友達と一緒に思いや願い、目的を共有する姿を見守る。
- ・ 年少児や年中児との交流の場をつくる。



・イメージや目的を共有し実現しようとする。
・友達と一緒に協力して遊ぶようになる。

4歳児

- ◇ 遊びに必要な物を身近な素材を使って作ろうとしたり、遊具や用具の使い方を自分で考えたりする。
- ◇ 気の合う友達と好きな遊具を持ち出して遊びを楽しむ。
- ◇ 教師よりも友達とのつながりが強くなっていく時期。

◎ポイント

- ・ 遊具・用具・素材の使い方がわかるようにする。
- ・ 友達と場を共有しながら、遊びに必要な遊具や素材を自分で見つけたり、要求したり、いろいろ試したりする環境をつくる。
- ・ 年長児とも一緒に遊ぼうとする姿を見守る。



・自分の思いや考えを表現し自己発揮する。
・気の合う友達と一緒に遊ぶようになる。

3歳児

- ◇ 砂・水・土などに親しみ、遊具・用具や素材を自分なりに使おうとする。
- ◇ 教師や友達と同じ場所にいたり、同じことをしたりして遊ぶ。
- ◇ いつも一緒にいたい友達ができる時期。

◎ポイント

- ・ いろいろな遊具や遊びの場に関心をもつようにする。
- ・ 自分のしたい遊びが見つけられるようにする。
- ・ 幼児が安心して遊ぶ雰囲気作りをし意欲をもって遊び続けようとする環境をつくる。
- ・ 年中児、年長児の遊びに興味をもった姿を見守る。



・好きな遊びを見つけて安定して遊ぶ。
・一緒に遊びたい友達ができるようになる。

◇ 平成23年度の実践事例について

平成23年度は、遊びの年間計画表に基づいて、遊具・用具・素材などをどのように環境構成していくかという視点で研究を行った。

その結果、実践後の保育記録について、次のような課題があげられた。

- ・ 幼児の実態にそった環境になっているか。
- ・ 幼児の言葉に耳を傾け、幼児の願い受け入れているか。
- ・ 幼児の姿の変容を追っているか。
- ・ 教師の願いが明確になっているか。

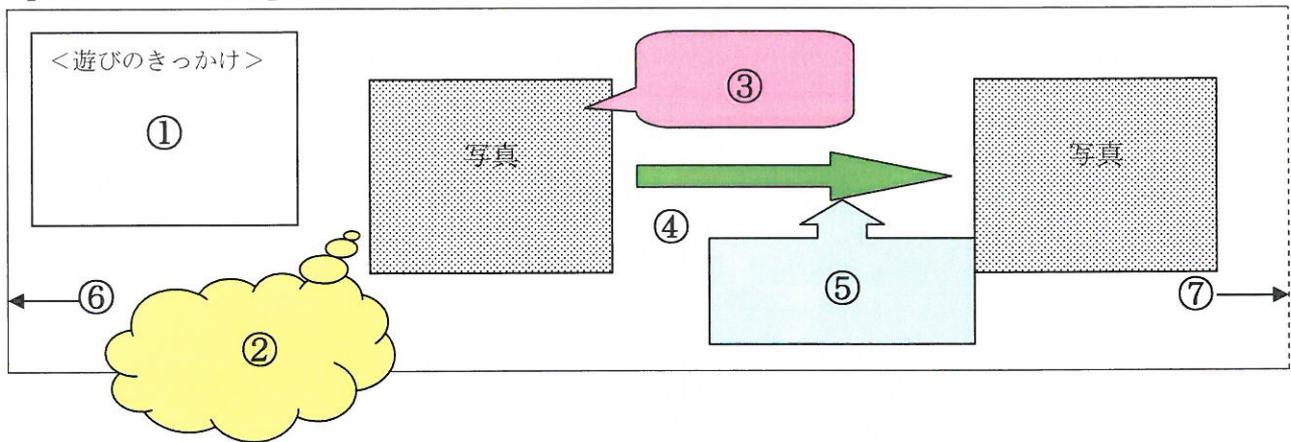
上記の反省を基に、平成24年度は、次にあげる点で実践記録がより明確になるようにした。

- ・ 実践を焦点化し、幼児の実態を具体的に捉えるようにする。
- ・ 幼児や教師が感じていること、考えていることを明確にする。
- ・ 援助のタイミングがわかるように、遊びの流れに沿って記載する。
- ・ 抽出児を選び、その変容を追うことで環境構成が適切であったか評価する。

◇ 平成24年度の実践事例について

次にあげるのは、実践事例の様式である。

【実践事例の見方】



- ① 事例の遊びが始まったきっかけを示す。
- ② 教師の願いや（幼児の様子を見ての）気づき
- ③ 幼児のつぶやき
- ④ 時間の経過
- ⑤ 行った環境構成の工夫
- ⑥ 実線 遊びの始まり、または、遊びの終わり
- ⑦ 破線 その後に遊びが続くこと、または、これまでの遊びの続きであること

実践事例 13

自然物を使って色水遊びを楽しんだ事例 -アサガオの色水遊びを通して-

(年少3歳児 6~7月)

【環境構成の工夫1】

<遊びのきっかけ>

年長児がしているオシロイバナでの色水作りに興味を持った。自分が育てているアサガオでも色水が作れることを知り、色水遊びが始まった。



【色水作りを楽しむ幼児】

時間が経つと...



【置き去りにされた色水】

きれいだな

色水掛けを作ったら、大事にするかな

あれっ！作った色水が置き去りになっている...

全員に色水遊びを体験してほしいな

楽しそうに作っているな

<教師の願い>

今回、アサガオを使った色水遊びをしてほしいと思った理由は、①幼児が苗植えをしたアサガオは、幼児にとって身近であり、花が咲くこの時期にできる遊びだから。②幼児が好きな水を使った遊びであるため、楽しんで遊ぶことができると考えたから。③3歳の幼児にとって簡単に色水ができて、可変的な素材であるから。④普段は見ているだけの植物が遊びにも使えることを知ることで、植物に興味を持ってほしいと思ったからである。

【環境構成の工夫2】

いいでしょ？

コップに入れるから袋を開けて下さい

ビニル袋以外にも色水作りをしたら、作った後にいろいろ使えるかな

自分のアサガオだけじゃなくて、たくさんのアサガオを用意すれば、作った色水を遊びに使うことができるかな

色水を作るための容器や透明のコップを用意する。

集めておいた、たくさんのアサガオを用意する。

一つ作ったら、色水遊びはおしまっているよ

【色水作りを楽しむ幼児】

一つ作ったし、他の遊びに行こうかな

<教師の願い>

今回、ビニル袋以外の容器で色水遊びをしてほしいと思った理由は、①作った色水を出し入れして、他の遊びにも活かせるようにするため、②色水を作る過程などに感触を楽しむことができると思ったからである。また、容器は、幼児の両手が入る大きさで色が見えやすいようにという理由から、ドンブリ型の容器を使った。その際、水に触れるのを嫌う幼児もいたため、従来のビニル袋を使った色水作りも認めた。アサガオは、一度にたくさん採るのは難しかったため、予め採っておいたものを冷凍しておいた。

私もやってみよう

ぼくのは、こんなきれいな色が出来たよ
○○ちゃんのもの、きれいだな

足の上で転がすようにもむと、いい色ができるよ

色水掛けを設置する。



【色水掛けに色水をかけている様子】

アサガオの近くにテントとベンチ、たらい(水を張った)を置いた色水コーナーを作る。



【友達と作り方を交流しながら色水作りを楽しんでいる様子】

作った色水を大事にかけているそれに、友達の色水と比べ合っているな

作るときにも友達とかがわってほしいな色水コーナーを作ったらいいかな

友達と話したり、作り方を真似したりしながら作ることができて、楽しそうだな

<考察>

- 色水掛けなど、作った物をみんなが見えるところに置くことは、作った色水を大事にするだけでなく、幼児同士が色水を見合っ、それぞれの色水について意見を言い合うなどのかかわりを持つことにつながることもあるということがわかった。
- 色水コーナーを一カ所に指定したことは、ようやく友達の存在を感じ始めた幼児にとって、友達を近くに感じながら作ることができ、自然と作り方を教え合うというような姿につながったと考えられる。発達段階によっては、好きな場所で作る方が遊びに没頭できることもあるが、3歳児にとっては、友達と一緒に作ることで、より安心して遊びを楽しむことができたようである。

たくさんできた

テーブルがあるから、一緒に遊んでいるな

みんなでパーティーをして、楽しそう



【一つのテーブルで色水遊びを楽しんでいる様子】

色水コーナーの近くにままと用のベンチを用意する。

これ、ジュースよ

ジュースで、乾杯！！

おいしいな



【色水をジュースに見立てて、友達とパーティーごっこを楽しむ様子】

近くに、ベンチをおいたら、どうかな

<考察>

- 色水を容器で作るなど幼児だけで工夫して扱うことができるようにすることは、ジュースに見立てるなどの新たな発想が生まれることにもつながることがわかった。また、色水に直接触れて遊ぶことができたため、視覚だけでなく、感触を楽しんで遊ぶ姿にもつながったようである。
- たくさんのアサガオをみんなで使うようにしたこと、たくさん色水を作りながら、十分遊びを楽しむことができていたように思う。

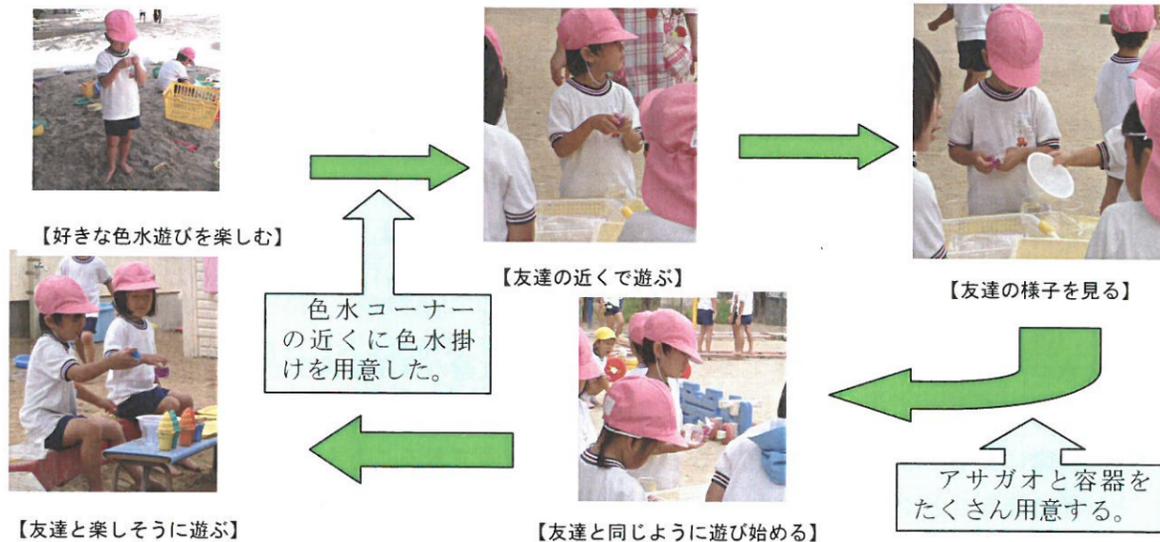
<個の変容>

ア 抽出児 A (男児)

抽出児 A は、自分の好きな遊びを見つけて遊ぶことができる。色水遊びにおいても、毎日作った色水を大事に持ち帰るほど色水遊びに興味を持って取り組んでいた。友達が、ビニル袋を使った色水作りから容器を使った色水作りが変わっても、色水がなくなることを心配してか、「僕はしない。」と言って、ビニル袋を使った色水作りばかりをしていた。友達と遊びの場を共有しながら、遊びをさらに発展させて遊んだときに感じる楽しさを味わってほしいという教師の願いがあった。

<環境構成の工夫>

- 自分の好きな袋を使った色水作りをしながらも、友達の様子を感じることができるように、色水コーナーの近くに色水掛けを用意した。
- こぼれるのがもったいないから容器は使わないという心配をしないで、たくさん色水を作れるよう、アサガオをたくさん準備し、使える容器を多数用意した。



A 児の変容

- 始めは、自分がせっかく作った色水がこぼれたりしてなくなるのが嫌だと思い、ビニル袋での色水作りだけでよいと言っていた。しかし、容器を使った色水作りを楽しそうにしている友達の姿や色水がたくさん出来ていることを近くで見ることで、興味を持ち、一緒に遊び始めた。その後、作った色水をコップに移し替えたりして楽しそうに遊んだ。

A 児を通して見える周りの様子

- たくさんの材料や道具があることにより、思う存分色水遊びを楽しむことができた。始めは、自分がたくさん作りたくて、アサガオを自分だけたくさん使おうとする幼児もいたが、一緒に遊ぶ友達が増えるにつれて、アサガオを分けてあげたり、道具がどこにあるかを教えてあげたりするなど、友達とのかかわりも見られた。

<考察>

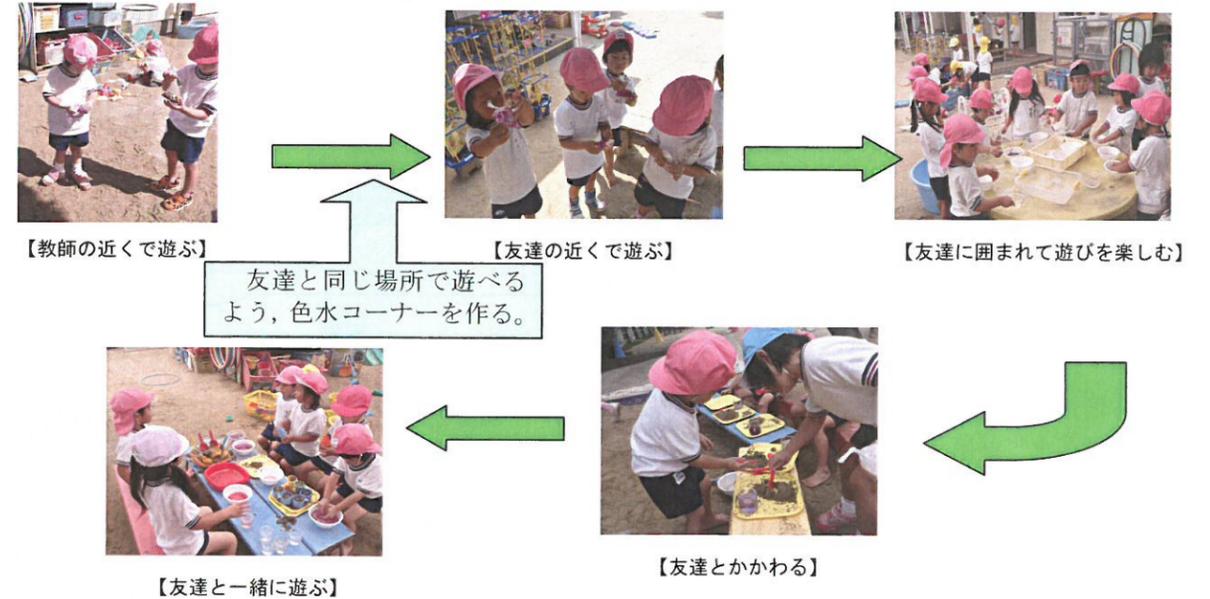
- 容器を使った色水作りに興味を示さなかったA児が、友達と同じ場所で、色水作りをして遊べるようにしたことで、色水をたくさん作って楽しそうにしている友達の姿に興味を持ち、友達と一緒に色水を作って遊ぶ姿が見られるようになった。
- みんなで使うことができるたくさんの材料や道具を用意することは、新しい遊び方に興味を広げ、よりいっそう思う存分遊びを楽しむことにつながるとともに、友達と材料を分け合ったり、道具がある場所を教えたりするなど、友達とのかかわって遊ぶ姿にもつながると考える。

イ 抽出児 B (女児)

抽出児 B は、教師の近くで安定して遊ぶことができる。色水遊びにおいても、友達と教師の近くにおいて、友達の様子を見ながら、友達が試している作り方を人知れず真似をして作ろうとするなど楽しんでいる姿が見られた。しかし一方で、友達とのかかわりたいのに話しかけようとしなかったり、友達から話しかけられると戸惑ったりすることもあった。少しずつ、友達と言葉を交わしたり、働きかけたりして、遊ぶことができるようになってほしいという教師の願いがあった。

<環境構成の工夫>

- 友達の近くで遊ぶ機会になるように、これまで各々が好きな場所で行っていた色水作りを、一カ所でするように色水コーナーを作った。



B 児の変容

- 友達とのかかわりたくてもなんと話しかけてよいかわからず、教師の近くでいつも遊んでいた。教師の近くにいながら、友達の近くで遊ぶ経験を重ねることで、教師がいなくても次第に友達と同じ場所で遊ぶようになった。また、言葉はなかなか出ないが、友達と同じ事をして楽しそうに笑うなど、友達とのかかわって遊ぶこともあった。

B 児を通して見える周りの様子

- 遊んでいる時に、遊びに加わる友達が増えたとしても、あまり意識はしていないようである。まだ、友達と遊びの楽しさを分かち合うというよりは、自分がその遊びを楽しむことが主である。しかし、同じ遊びをしていることで、誰かが歌を歌えば手拍子をしながら聞いたり、ままごと遊びで同じ料理と一緒に食べる仕草をしたりするなど、少しずつ友達とのかかわりが見られるようになった。

<考察>

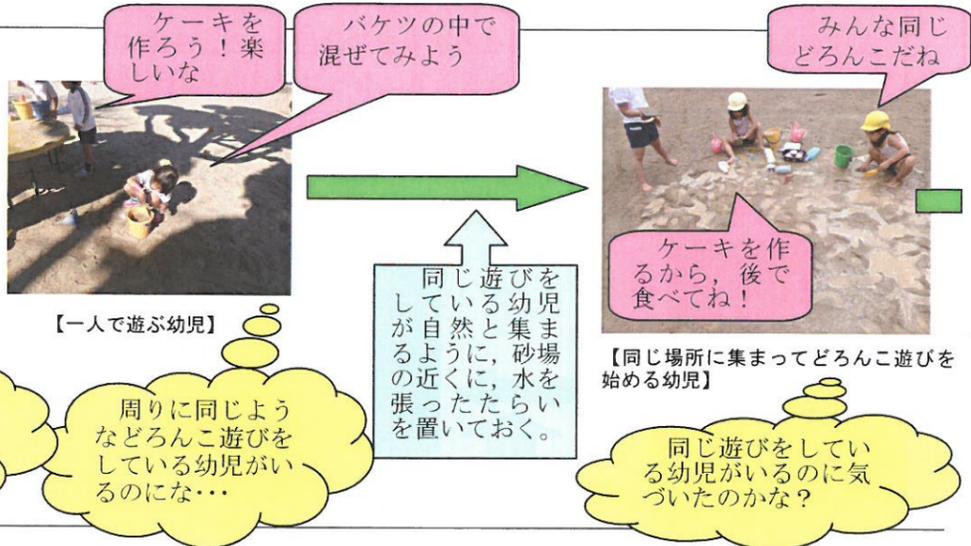
- 友達とのかかわりたくても、上手くできなかったB児が、色水コーナーという、友達が集まる場所で、教師の近くにいながら遊ぶ経験を重ねたことで、教師がいなくても次第に友達と同じ場所で遊ぶことができるようになり、友達と同じ事をして楽しそうに笑うなどのかかわりが見られるようになった。
- 友達が一つの場所に集まるような環境を整えることは、友達と進んでかかわろうとする幼児にとっても、かかわるのが苦手な幼児にとっても、友達と一緒に遊ぶことに慣れ、友達と楽しさを共感することにつながると考える。十分にこの経験を重ねることで、どの幼児も友達と一緒に好きな場所で好きな遊びを楽しむことができるようになる。

実践事例14

砂・水・土の感触を味わいながら遊びを楽しんだ事例 — だろんこ遊びを通して —
(年中4歳児 5~7月)

【環境構成の工夫1】

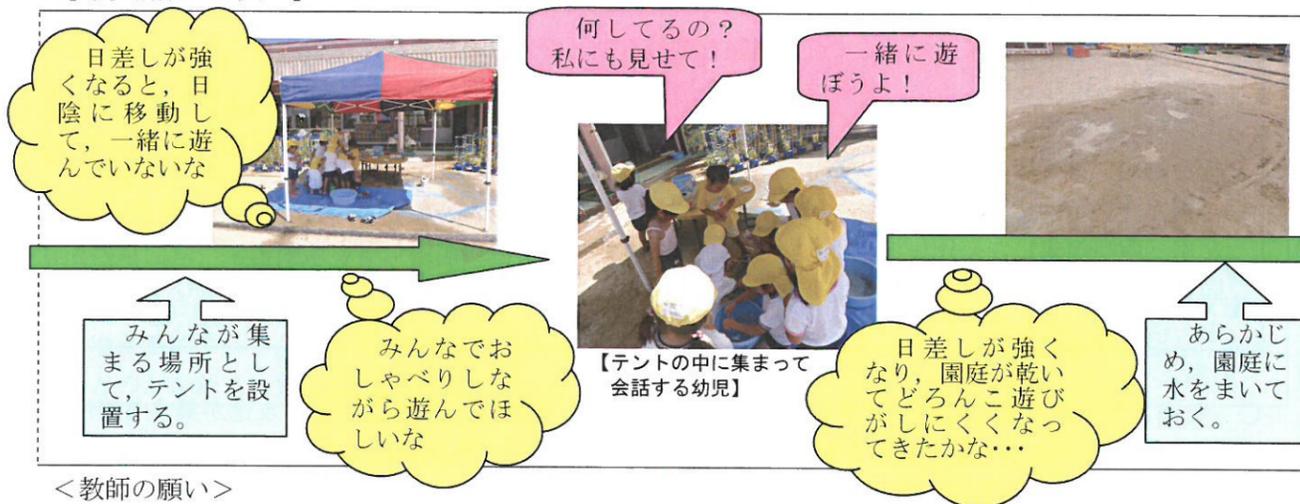
＜遊びのきっかけ＞
年少時からよく遊んでいた砂場で遊ぶことが多かった。バケツを持って水道まで行き、砂に水を入れ始め、思い思いにだろんこ遊びが始まった。



＜教師の願い＞

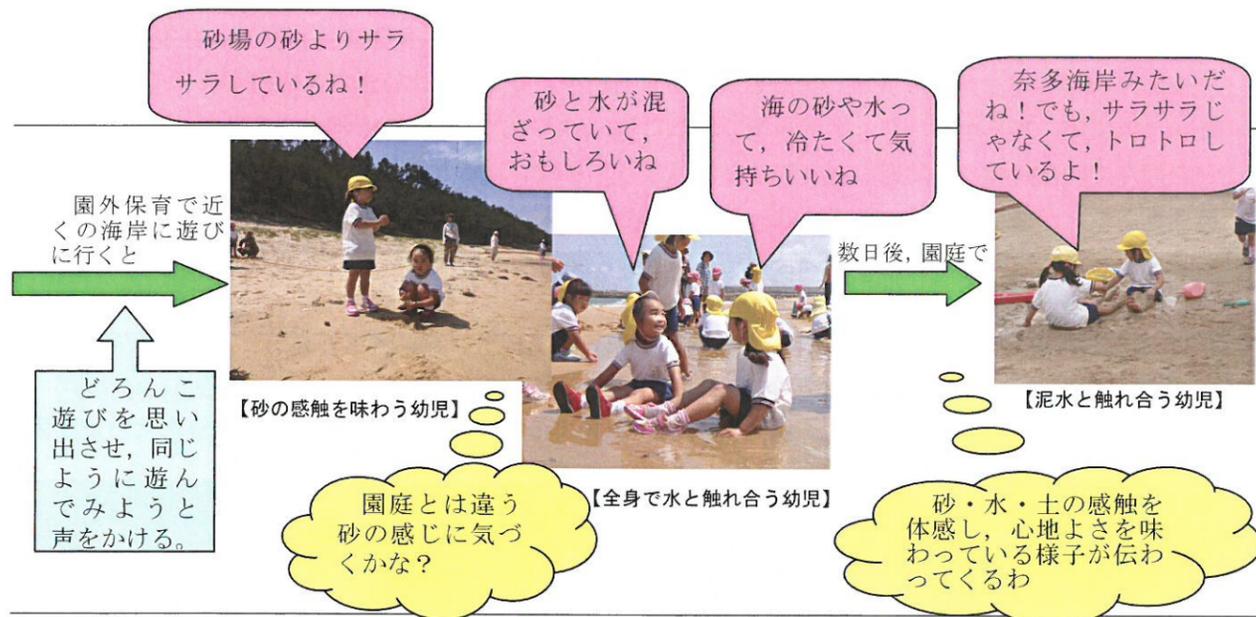
入園・進級当初から、外遊びが好きで、自分がしたい遊びを見つけて遊ぶ一方、新しい友達関係や環境になったため、幼児同士のかかわりは少なく、一人遊びや顔なじみの友達同士だけで遊ぶ姿が見られていた。年少時に、砂場でたくさん遊んだ経験から、砂場近くでケーキを作ったり、砂を盛って山にしたりする幼児が多かった。同じ遊び場にはいるが、言葉のやりとりをするわけではなく、一人遊びやいつも同じ友達と遊ぶ幼児がほとんどであった。そこで、教師はもっと幼児同士のかかわりを増やしたいという願いのもと、触った時の感触を、言葉にして伝え合うことができる砂・水・土に触れての遊びをさせることにした。

【環境構成の工夫2】



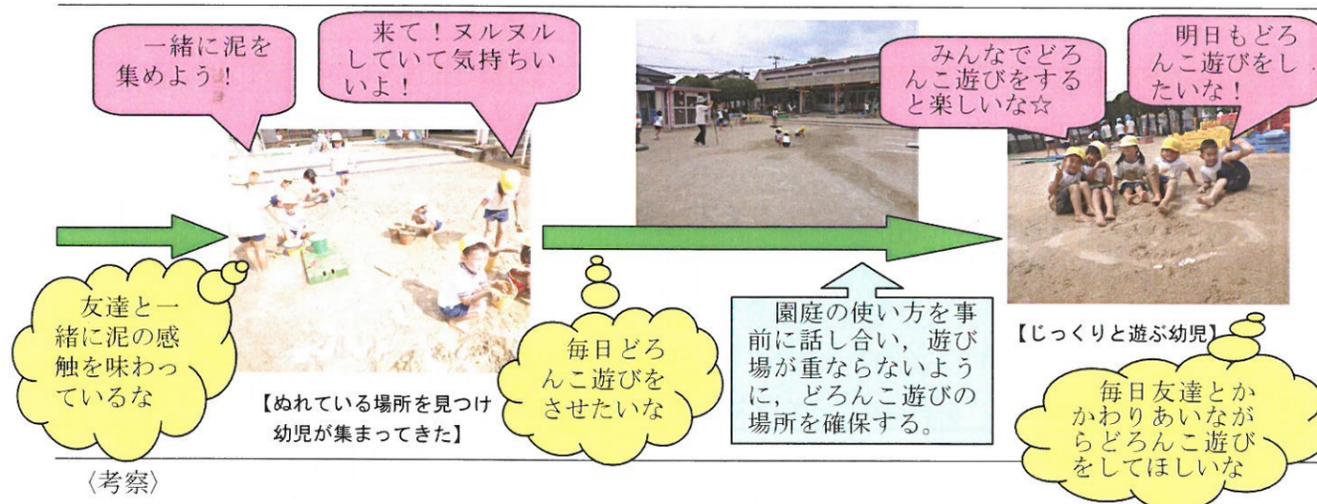
＜教師の願い＞

友達とかかわりが見られるようになってはきたが、それぞれのグループが園庭のあちらこちらでしたい遊びをして遊んでいるため、グループ間の交流はあまり見られなかった。そこで、もっと友達とかかわり合ったり、入り交じったりして遊んでほしいという教師の願いのもと、幼児たちが集って一緒に遊べる場所を作るためにはどうしたらいいのだろうと、環境構成を考えてみることにした。



＜考察＞

- 気温が上がるとともに、水を使つての遊びが増えてきたので、園庭の水道の近くに水を張ったたらいを置いてみた。たくさんの幼児がたらいの周りに集まってきた。体に水をかけ合ったり、砂に水を混ぜたり、友達と一緒に川を作ったりして遊ぶ中で、少しずつ友達とかかわりが見られるようになってきた。
- 海岸で座り込んで、全身で砂・水と触れ合う経験をしたことから、だろんこ遊びが日に日にダイナミックになっていった。友達と顔を見合わせながら、砂・水・土の感触を言葉で伝え合ったり、言葉のやりとりを通してイメージを共有したり、友達を誘い合ったりして、小集団で遊ぶようになった。



＜考察＞

- 日よけのためにテントを設置したことで、長い時間遊ぶことができるようになり、集まってきた幼児同士で自分がしたいだろんこ遊びを友達と一緒に思いきり続けることができた。
- 教師が水をまいて園庭の土を軟らかくしておいたことで、だろんこ遊びをする幼児が増えた。友達と一緒に軟らかくなった泥を集めたり、体につけたりして気持ちよさを実感し、そのことを言葉で伝え合いながら、互いにかかわり合っただろんこ遊びの姿が多く見られるようになった。

<個の変容>

ア 抽出児 A (女児)

抽出児 A は、水を使つての遊びが好きで、進級当初から砂・水・土に触れての遊びを楽しんでいた。一人で体に水をかけたり、水が張ってあるたらいに入ったりして、心地よさを味わって遊ぶことを好んでいた。周りの幼児から「あっちに行こう」と言われると、したい遊びがあっても友達に流されることが多く、自分の考えを言ったり、自分から人とかかわって遊んだりする姿はあまり見られなかった。教師は、友達と誘い合ったり、自分の気持ちを言葉で伝え合ったりして遊んでほしいという願いをもっている。

<環境構成の工夫>

- A児は、水遊びが好きのため、たくさんの幼児が集まってくる砂場の近くに水を張ったたらいを置いておいた。
- その後、友達とかかわって遊んでほしいと思い、砂場付近だけでなく、園庭で幼児が集って遊んでいる場所に水をまいた。



【5月 一人で遊んで満足している】

【6月 周りの幼児が気になる(右)】

【7月 友達とおしゃべりしながら遊ぶ(手前)】

たくさんの水を用意し、水遊びが好きなA児に興味をもたせる。

他の幼児がしているどろんこ遊びに関心をもつことができるような言葉がけをする。

A児の変容

- 友達関係が、【一人遊び】→【近くで遊んでいる友達が気になる】→【友達と一緒に遊ぶ】→【自分も一緒にやってみる】→【友達とおしゃべりしながら遊ぶ】に変容してきた。

A児を通して見える周りの様子

- A児の周りに同じような遊びを好む幼児が集まってきて、砂・水・土がもっている感触を味わいながら、繰り返し遊んでいた。幼児たちは、一緒に遊ぶ友達ができたことで友達の遊びをまねしたり、「ここはザラザラ」「こっちはトロトロ」などと感じたことを言葉で伝えたり、泥の軟らかさを友達と比べたりしながら、かかわり合って遊ぶようになってきた。

<考察>

- 一人でどろんこ遊びをすることが多かったA児に対して、他の幼児が集まってくる場所にどろんこ遊びができるような場を作ったことで、友達の遊びに興味をもつようになり、同じ遊びを一緒にしながらかかわって遊ぶようになった。
- 「ここはザラザラ」「こっちはトロトロ」など、泥の感触を言葉で伝え合ったり、ジュース屋やケーキ屋ごっこで、「いらっしやいませ」「これどうぞ」といった言葉のやりとりをしたりすることが増え、自分から友達とかかわろうとする姿が見られるようになった。

イ 抽出児 B (男児)

抽出児 B は、とても活発でさまざまな遊びに興味をもっている。しかし、遊びが長続きせず、じっくりと一つの遊びをしないために、友達とのかかわりは少なく、一人で遊ぶことが多かった。自分がやりたいと思える遊びが見つからないまま、新しい遊び場へ移ってしまうことが、遊びが続かない原因と考えた。教師は、興味をもった「どろだんご」をきっかけに、一つの遊びを長く続けて、他の幼児とかかわって遊んでほしいという願いをもっている。

<環境構成の工夫>

- B児が泥だんごに興味を持ち始めた頃、読み聞かせの時に「どろだんご」の絵本を読み聞かせ、クラス他の幼児にも泥だんごの作り方を知らせた。その後、保育室の絵本コーナーに置いておき、いつでも見ることができるようにした。



【6月 年長児が作っている泥だんごに出会う(左)】

【6月 時間をかけて泥だんごを作る】

どろんこ遊びにも泥だんご作りにも使う道具を用意する。

【7月 友達と泥だんごを作って遊ぶ(右から2人目)】

B児が泥だんご作りで遊んだ時に、「B児が一生懸命に泥だんごを作っていたよ」とみんなに話す。

どろんこ遊びが好きな他の幼児が泥だんご作りにも興味をもつように、「どろだんご」の絵本を読み聞かせる。

泥だんご作りを通して、友達に認められる喜び、友達が自分のところにやってくる満足感を実感させる。

B児の変容

- これまでは、興味がある遊び場に自分から行くばかりだったB児であったが、自分のところに友達が来てくれることを経験し、楽しさを実感した。また、砂・水・土がもつ可変性(泥水になったり、泥だんごになったり)に魅力を感じたことで、作り方を工夫したり、形や仕上げにB児なりの見通しをもったりしたことで、継続して遊ぶようになってきた。

B児を通して見える周りの様子

- B児が作る泥だんごの周りに幼児が集まるようになり、B児が見本を見せたり、作り方を教えたりして一緒に遊ぶようになる。これまで、泥だんご作りに興味を示さなかった幼児も「B児に教えてもらったよ!」と見せに来るなど、作った泥だんごを比べ合ったり、認め合ったりしながら、友達と一緒に遊ぶ楽しさを実感する幼児が増えた。

<考察>

- いつもより長く遊びにかかわっているB児の姿を褒め、集まりの時に紹介したり、泥だんごに関連する絵本を読み聞かせたりするなどの支援を、適切なタイミングで行ったことで、遊びに自信をもたせることができた。
- どろんこ遊び・泥だんご作りに共通に使える道具を、B児が泥だんごを作っている近くに置いておいた。泥だんごを作り続けているB児のところに、どろんこ遊びが好きな幼児が集まってきて、泥だんごの作り方をしたり、聞いたりして、一緒にかかわり合いながら遊ぶ姿が多く見られるようになった。

実践事例 15

友達と一緒に作る楽しさを知り、主体的に遊びにかかわるようになった事例

— 泥だんご作りを通して — (年長5歳児 4～6月)

【環境構成の工夫1】

<遊びのきっかけ>
戸外での鬼ごっこや室内でのままごと遊びなど、同じ遊びを繰り返す幼児の姿が見られた。



【泥を使って遊ぶ幼児】

先生、何して
るんだろう？

一緒に作ろう・・・



【友達と一緒に楽しむ幼児】

教師自身が泥だんご作りを楽しみ、幼児が興味・関心をもつようにする。

少し、自分でもやってみようと思ったみたいだ

丸く作れるよ！

年長になったら泥だんご作りにも興味をもってほしいなあ・・・

幼児が驚くような光る泥だんごを作ってみよう！（泥だんごの本も読んでみよう）

<教師の願い>

年長児は、年中児の頃から土・水に親しみ、泥で遊んだり、泥の固まりを作ったりすることが多かった。素材となる土山が年長保育室の近くにあり、教師が泥だんご作りを提示すれば、すぐに興味を示すことが予想された。また、年長のこの時期は、できばえにこだわり、完成するまで取り組む根気強さが芽生える時期である。十分に遊ぶ時間を保障し、一つの遊びにじっくりとかかわることで、達成感や満足感を味わって遊んでほしいという教師の願いがあった。

【環境構成の工夫2】

つるつる光ってる！これ、(私のと)同じだよ



【写真と見比べる幼児】

さらさらしているよ！この砂つけるとつるつるになるよ！この土がいいよ



【自然に輪になる幼児たち】

(園庭の真ん中で) 白い砂をパッパッってかけると白だんごだよ！



【白い泥だんごを得意そうに見せる幼児】

遊びの場に自由に持ち込めるよう掲示用の写真(泥だんごの作り方見本)を準備する。
*マグネット付き

泥だんご作りがわかってきたな！（泥だんごの本をもう一度読んであげよう）

友達と認め合っているな

白い色にこだわりを持って作っているな！みんな自分のこだわりをもって泥だんごを作っているんだな

<教師の願い>

泥だんごの表面に白い砂をつけ、自分なりに工夫している様子が見られた。教師が作った泥だんごのように、つるつるした物を作りたい幼児もいる。それぞれの願いがかなうことができるように、個々に応じた対応が必要だと感じた。また、集中している幼児がいる一方で、うまくいかずにあきらめてしまう幼児もいる。教師がいなくても幼児同士で教え合ったり、自分から繰り返したり、時間をかけてかかわることで、少しずつ上手にできるようになることを実感してほしい。

それ、どこで作ったの？

パッパッってかけよう

泥だんごに適した素材の土に気付いてほしいため、幼児が自ら選んだ場所での活動を見守る。

【泥だんごの土に興味をもち、できた泥だんごを見比べる幼児】

【輪になって作る幼児たち】

園庭のいろいろな場所で、さらさら砂を発見する幼児を認め、他の幼児に知らせる。

こここの砂がいいよ

まだ要領がよくわからない幼児がいるな！一緒に作ってみよう・・・

自分たちで遊び始めたな！この幼児たちは、私がいなくても大丈夫

友達の泥だんごと見比べているなあ・・・

磨くためのさらさら砂がある場所を見つけたな。輪になって何を話しているのかな？友達に教えてもらっているのかな？

<考察>

- 晴天の日が続くこの季節に泥だんご作りに取り組んだことが、毎日泥だんご作りを続けることにつながった。できた泥だんごを箱やビニール袋に入れて各自が大切に保管したり、誰が作った物かわかるように名前をつけたりしたことで、泥だんごを大切に作る習慣ができた。
- 泥だんご作りは個人の活動ではあるが、その過程においては、遊びの場を共有したり、友達の作品を認めたりなど、友達とのかかわりが多く見られる。また年長児にとっては、教師のかわりよりも友達とのかかわりで遊びが継続したり、充実感を味わったりする場面が多いことがわかった。

「泥だんご博物館」を設置する。

まだ泥だんご遊びをしていない幼児にも興味をもってほしいなあ・・・

泥だんごの色に気付き始めたぞ。湿り気やねばりがあるため、男児にとっても作りやすいようだ

【こだわりをもって作った泥だんごを見る幼児】

教師も気付かなかった場所で、幼児が黒い土を発見したことを他の幼児にも知らせる。

【手についた泥を見比べる幼児】

僕は名人なんだよ！「僕の博物館に入れてください！」

手に泥がくっつかなくなることに気付いたようだ

手につかなくなったら、つるつるになるよ！

これ初めてできた黒だんご！

<考察>

- 鬼ごっこや室内のままごとだけでなく、この場所ではこんなこともできるという遊びの経験を増やしていくというねらいで遊びを紹介していった。遊びの楽しさがわかってからは、教師の環境構成がなくても幼児同士がお互いに刺激し合って、工夫したり、相談したりして遊びを続けることができた。
- 幼児一人一人の遊び始める時期や興味の持続期間を把握することで、自発的に遊びに興味をもつことを大切に、時期がくるまで友達からの誘い、教え合いなどのかかわりを見守っていきたい。

<個の変容>

ア 抽出児 A (女児)

抽出児Aは、自分なりの目的をもって遊びにかかわることができる。泥だんご作りにおいても4月の段階から興味をもち、丸い泥だんごを作ることを毎日楽しんでいた。遊びの中で強い自己主張をすることがなく、友達とのかかわりを積極的に求める方ではない。遊びが充実することで、自信をもって自分を表現できるようになってほしいという教師の願いがあった。

<環境構成の工夫>

- 自分から物を要求することがないA児が、今どのような思いで、どんな泥だんごを作ろうとしているのか、そばで見守り、必要な物がありそうな時は援助する。
- 幼児たちはそれぞれ自分なりの願いをもって取り組んでいる。過剰に誉めたりせずに、目を合わせて認めるようにし、泥だんごを磨く時に落とすことを考慮して、大きめの布を準備しておく。



【4月 泥だんご作りに夢中になり、黙々と作り続けるA児】

自分のハンカチを使って磨いていたA児に、磨き用の特別な布をそっと渡す。



【6月 白い土を選択し、初めてできた“光る泥だんご”（下）をC児に認めてもらったA児】



Aちゃんのががみみたいに光っているよ・・・

A児の変容

- A児は、自分がイメージする物を自分の力だけで作り続け、それが形となって表現できたことが何よりもうれしかったのだろう。誰も作ったことのない物を思いがけず作ることができA児自身が一番驚いたようであった。「誰にも渡さずずっと持っておきたい」とこれまでになく自分の気持ちを表現できた。

A児を通して見える周りの様子

- A児が作った物を一緒に作っていた友達C児が「かがみみたい！」と認めたことが友達とのかかわりを広げることに繋がった。C児は、A児と一緒に遊びを繰り返し楽しんでいたので、A児の驚きやうれしさを共有できたのだろう。C児がA児と他の幼児とをつなぐ役割を果たしていた。他の幼児も同じ遊びを経験しているために、「かがみみたい！」の一言でA児の様子を理解し、認め、新たな目標とすることができた。

<考察>

- 繰り返し遊び続けることでA児の作った泥だんごは、友達から認められるようになった。「先生、Aちゃんのすごい。本当に光ってるよ。」と他の幼児もA児の作品を見つめ、A児自身も驚いたように満足感に浸っていた。学級の中ではあまり目立つ存在ではないA児だが、毎日大事そうに家に持ち帰り、次の日も磨き続ける姿が見られた。幼児が幼児の中で認められることで、幼児自身の自分に対する評価が高まり、自信をもって遊び続けたり、表現したりできるようになった。

イ 抽出児 B (男児)

抽出児Bは、鬼遊びなど戸外で元気に遊ぶことはできるが、手先を使った製作活動や跳び縄やフープなどを使った運動遊びが苦手であり、自分ができないことはしないことが多かった。この泥だんご作りも4月当初かかわる姿が見られたが、上手にできないことから途中であきらめていた。人とかかわる力は育ちつつあり、友達に影響を与える力を持っている。B児が、遊びを繰り返し楽しみ、自信をもって活動できるようになってほしいという願いがあった。

<環境構成の工夫>

- 仲良しの友達と遊ぶ機会になるように、黒い泥だんごを作っている場所を紹介する。



【4月 友達がしていることを気にしているが遊びには入ろうとせず立って見ているB児（左上）】



黒い湿った土に出会ったことで、うまく泥だんごを丸めることができたB児を認め、励ましたり、誉めたりする。（黒土の場所の提示）



【6月 黒い土に興味をもち、自分もできたことを喜び友達と一緒に繰り返し遊ぶB児（中央）】

B児の変容

- B児は、友達と一緒に遊びを経験したいという願いをもっていましたが、友達と同じようにできないことからあきらめてしまっていたようである。友達が黒い土から作ることを発見したことから、再度挑戦してみようと自ら取り組む姿が見られた。環境がB児を変容させ、黒土で泥だんごを作っている友達の姿に心動かされていった。湿り気のある黒土は、B児にとっても上手く丸めることができ、扱いやすい素材であった。教師に認めてもらいたく「先生、できた～」と自ら持ってくる姿は、これまで見たことがない姿であり、B児はこの経験に自信をもち、製作活動においても生き生きと活動する場面が多く見られるようになった。

B児を通して見える周りの様子

- いつも元気に戸外で遊ぶB児には4～5人の遊び友達がいる。B児は泥だんご作りで遊び始める時期が一番最後になっていた。すでに遊びの楽しさがわかり満足していた他の友達も、B児作り始めたことで再度一緒に楽しもうとする姿が見られた。物があるからそれにかかわる幼児の姿は予想できたが、その環境にかかわる人の姿が、更なる環境となり人とかかわることにつながっていった。

<考察>

- B児は、物を器用に扱えず、遊びになかなか手が出せないことがある。しかし、すでに遊んでいる友達が周囲にいることによって影響し合い、友達によって遊び続けることができることがわかった。
- B児が黒土にかかわることは、別の幼児にとってもそのことが新たな刺激になり、友達同士がかかわり合うことにつながった。
- 幼児が遊びに興味をもつ時期は様々であるため、どの幼児も遊び始めるチャンスをもっている。どの時から遊び始めたとしても一つの遊びを納得いくまで遊び込むことができるように長期間を見通した計画が大切であると言える。

Ⅲ 研究のまとめ



本研究の保育実践を通して、下記のようなことが明らかになってきた。

- 次のグラフは、年長児4月から6月に「泥だんご作り」を行った幼児の人数の変化である。教師が環境構成を工夫することで、遊びにかかわる幼児の人数が変化し、幼児自身が新たな遊びの環境を見つけることにつながった。幼児が自ら遊びを見つけ、新しい遊びに挑戦したり、繰り返し楽しんだりすることで、一つの遊びを長い期間継続して遊び続け、そのことを通して友達とのかかわりを広げることができたと言える。

遊びにかかわる幼児の人数の変化



- また、幼児の遊びと密接な関係にあるのが教師の意識である。次のグラフは、環境構成の工夫に関する教師の意識の変容を表している。教師は、幼児の遊びの姿を予想し、どのような活動の場が必要なのか、また教師間でどのように連携すればより遊びが発展していくのか、少しずつ計画・実践できるようになってきたと言える。

環境構成の工夫に関する教師の意識の変容



<今後の研究の課題>

- 幼児の興味・関心に即した遊びの環境をさらに工夫すること
- 教師間の連携を密にし、幼児の姿や思い、願いの捉え方、援助のタイミングを共通理解すること

